# 光源氏（モデル源融）の愛した地 塩釜へ

## ～塩釜・平安浪漫の旅～

塩がまにいつか来にけむ
多なぎにつりする私は
ここによらなむ

# 光源氏のモデル　源融（みなもとのとおる）ってどんな人？

源融は「源氏物語」の主人公「光源氏」のモデルといわれ、今から千百年以上も前、塩釜の融ヶ岡に邸宅を建て、そこから見える千賀ノ浦（塩釜湾）の風光明媚な風景をこよなく愛したといわれています。

## 光源氏が塩釜に住んでいた！

今から千百年以上も前、西暦八六四年の平安時代、中納言源融は陸奥出羽按察使（あぜち）（東北地方を監督する役職）を兼務しました（遙任といい、実際には赴任しなかったという説が一般的です）。

塩釜の風光明媚な御殿山と呼ばれる塩釜女子高周辺に、貴族の屋敷がありました。古文書のいい伝えでは、源融もそのそばの俗に“融ヶ岡”と呼ばれる塩釜高校のあたりに「融公邸（とおるこうてい）」として屋敷をかまえたとされています。

そして、千賀ノ浦（塩釜湾）の風景をこよなく愛し、のちに、都へ帰ってからも、塩釜の景色が忘れられず、「塩釜」を模した「六条河原院」を造ったのです。

（鹽松勝譜　巻之一）

鹽竈神社の表参道真向かいにある融ヶ岡を示す碑

融ヶ岡の景色

## 源融（みなもとのとおる）

通称:河原左大臣（かわらのさだいじん）

| | |
|---|---|
| 弘仁13年（822） | 誕生　父・嵯峨天皇　母・大原全子 |
| 承和5年（838） | 源朝臣姓を賜る。正四位下（17歳） |
| 嘉祥3年（850） | 従三位（29歳） |
| 斉衡3年（856） | 参議（35歳） |
| 貞観6年（864） | 中納言、陸奥出羽按察使（あぜち）（43歳） |
| 貞観8年（866） | 「応天門の変」で源信と謀議があったと密告されるが無罪（45歳） |
| 貞観12年（870） | 大納言（49歳） |
| 貞観14年（872） | 左大臣（51歳） |
| 貞観18年（876）〜元慶8年（884） | 門を閉ざして出仕せず |
| 元慶8年（884） | 陽成天皇の退位で即位を表明するが藤原基経に拒否される（63歳） |
| 仁和3年（887） | 従一位（66歳） |
| 寛平7年（895） | 8月25日死去。正一位追贈。「河原左大臣」と称される。（74歳） |

# 源融の系図

- 源融（みなもとのとおる）★光源氏のモデル
  - 昇
    - 適（はじめ）
      - 安法法師（あんぽうほうし）　?～永祚元年（九八九）までの生存は確認（法中補任天王寺別当次第）
        - 女 ＝ 居貞親王（三条天皇）（おきさだしんのう）
    - 女子
      - 顕忠 富小路右大臣（あきただ）　昌泰元（八九八）年～康保元（九六五）年
    - 時平 ＝ ○
      - 褒子（京極御息所）
        - ＝ 宇多天皇 ★源氏物語夕顔怪事件のモデル
    - 宇多天皇
      - ＝ 貞子（小八条御息所）　賀子・第一女（一代要記）更衣従五位上（皇胤系図）
      - ＝ 依子内親王　女五官（二中歴・後撰和歌集）第七女（日本紀略）　寛平七（八九五）年～承平六（九三六）年　後撰和歌集巻十四定家本勘物、鳳宮、依子内親王、母更衣貞子、大納言昇女」
        - 醍醐天皇
          - ＝ 女子
          - ＝ 重明親王（しげあきらしんのう）　延喜六（九〇六）年～天暦八（九五四）年
            - ＝ 徽子女王（きしじょうおう）★六条御息所のモデル
              - 規子内親王
              - 村上天皇
        - 藤原忠平（ふじわらのかんし）
          - 藤原寛子

皇胤系図　宇多天皇 ―― 依子内親王　母更衣従五上源貞子。民部卿昇女。
　　醍醐天皇 ―― 重明親王　本名将明　母大納言源昇女。式部卿三品。

# 源融（みなもとのとおる）が光源氏のモデルといわれる理由

なぜ源融が「源氏物語」の主人公「光源氏」のモデルといわれているのか？
その理由は、「境遇が似ている」「舞台が源融ゆかりの地である」ことがあげられます。

## 境遇が似ている

源融は、父・嵯峨天皇、母・大原全子の間に生まれ、また兄弟も帝となった中で自らは臣下として仕えましたが、北家藤原氏に敗れて政治的には不遇でした。須磨に流された光源氏と同じく、源融は、実権を握ることができませんでした。

そして、光源氏と同じように、源融も評判の美男子だったそうです。

## 源氏物語は、源融一族の物語？

「源融」と同様に、光源氏のモデルといわれる人物は、「藤原道長」「業平中将」など複数存在します。「源高明」もその一人ですが、実は「源融一族の系図」にあるように、源融一族が世代をまたいで源氏物語のモデルになっていて、「源氏物語は源融一族と深い関わりがある物語ではないか」ともいわれているのです。

## 源氏物語の舞台は、源融ゆかりの地

### ◆源融の山荘棲霞観跡「清涼寺」が源氏物語の「嵯峨野の御堂」◆

嵯峨野の御堂は、源氏物語では光源氏が大覚寺の南に土地を求め、紫の上が源氏四十の賀を記念して薬師仏供養を行った所として出てきます。

その嵯峨野の御堂が、源融の山荘棲霞観跡である清涼寺のことといわれています（境内にある宝篋院塔は源融の墓。その隣に光源氏ゆかりの「恋の木」が立っている。また「夕霧の墓」もある。霊宝館（四～五月、十～十一月のみ開館）に安置されている国宝・阿弥陀座像は源融の顔をモデルに作られたという。）。

源融公墓所と　恋の木

京都本覚寺に残る源融像

### ◆源融が塩釜を模して造った「六条河原院」は、光源氏の住まい◆

当時、源融が都の鴨川のほとりに、素晴らしい塩釜の景色を模した「河原院」という広大な庭園池と、屋敷を造ったということです。難波（大阪湾）より毎月（一説には毎日）、三十石の海水を運び汲んでその池に注ぎ「藻塩焼き」という製塩を行い、雅な塩釜の風景を再現し、楽しんでいたといわれます。

こうした振舞いから源融は「河原左大臣」と呼ばれるようになり、「庭に造った美しい塩釜の景色」の話は「伊勢物語」などにも取り上げられ、広く知られるところとなりました。

その「六条河原院」を、源氏物語に登場する光源氏の住まい「六条院」や、夕顔の段に登場する「某の院」のモデルにしたと考えられています。

河原院跡碑

# 光源氏の愛した地・塩釜

## 京都に移された塩釜

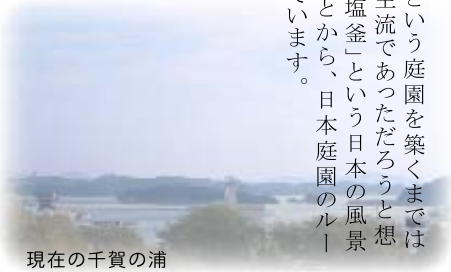
### ◆塩釜という名のテーマパーク◆

塩釜を詠んだ和歌は今も三百首以上残されていますが、当時の都人は単に塩釜の風景を想像したのではなく、源融によって「京都に移された塩釜　六条河原院」を眺め、遊んで、みちのくの塩釜を訪れたつもりになって詠んだのです。

まさに「塩釜」という名のテーマパークだったわけです。

### ◆日本庭園のルーツ塩釜◆

源融が「塩釜」という庭園を築くまでは中国式の庭園が主流であっただろうと想像されますが、「塩釜」という日本の風景をモデルにしたことから、日本庭園のルーツとも考えられています。



現在の千賀の浦

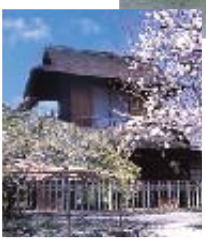
### ◆京都市下京区本塩竈町◆

「京都に移された塩釜」の痕跡は、今も京都市下京区の五条大橋の近くに本塩竈町と塩竈町の名として残されています。

また、近くにある東本願寺の別邸「渉成園（しょうせいえん）」は、この大庭園跡地の一部ともいわれています。江戸時代に復元されたもので、往事の規模には及びませんが、それでも二百m四方あります。

今も「塩釜の手水鉢「塩釜の井」などが残り、その閑静な庭園は国の名勝にも指定され、京都のビル街の一角に、時を越えた美しい空間が広がっています。

渉成園



## 塩釜の金が源融の財力!?

### ◆塩と金のまち塩釜◆

西暦八六四年頃の塩釜は「国府津千軒（こうづせんけん）」と呼ばれる国府多賀城の港になっていて、海路で都と結ばれた軍事・文化・物流の拠点でした。塩釜は、古くから塩造りで栄えた町であり、食用はもちろん、軍事用にも大量製塩されていました。

また、源義経を奥州平泉に導いた金売吉次が、多賀国府のあたりに住んでいたと平家物語に描かれています。もしかすると奈良から平安時代にかけてあった「鳥居原古代市場（現在の塩釜高校校庭）」では、塩ばかりでなく、金の取引も行われていたのかもしれません。

源融の母・大原全子の祖先は、百済王（敏達天皇孫）より出たと『新撰姓氏録』にはあります。日本初の金（宮城県内産）を献上した百済王敬福の一族と、あるいは関係していたのかもしれません。宮城の産金から莫大な財力を得て、大庭園「六条河原院」は、造営・維持されたとすれば納得できるところですね。

鳥居原古代市場跡碑

# 光源氏の愛した地・塩釜

源融と塩釜の深い関わりは、物語や能、歌など数多くの文献に描かれています。

## 「伊勢物語」にみる源融と塩竈

◆伊勢物語「塩竈」第八十一段　作者不明◆

むかし、左大臣源融という方がいらっしゃった。鴨川の岸の六条の辺りに、家を風流に造って住んでおられた。

十月の末近く、菊の花がもう盛りをすぎて、紅葉も様々に見られるときに、親王たちをお招き申し上げて、一晩中酒宴を催して管弦を楽しみ、夜が明けてゆく頃、この邸宅の素晴らしさを讃える歌を詠み合った。

その時、そこに卑しい翁がいて、板敷の下を這い歩き、人々がみな歌を詠み終わってから詠んだ。

塩竈にいつか来にけむ朝なぎに
釣りする舟はここによらなむ

塩竈にいつのまに来てしまったのだろうか。朝凪のうちに釣りする舟は、ここに寄って来て欲しいものだ。

と翁が詠んだのは、陸奥の国へ行って、山水の美に富んでいる所が多かったが、日本六十余国の中で、塩竈という所に似たところはなかったので、翁は、この邸宅を愛でて、「塩竈にいつのまに来てしまったのだろうか」と詠んだのであった。

## 「能」にみる源融と塩竈

◆能「融（とおる）」◆

汐汲みの老人が、源融の化身として登場します。

都六条河原院で休息していた東国からの旅僧の前に、田子桶を担いだ老人がやってきて、私はこの所の汐汲みであるという。

僧は都のなかに汐汲みが居るはずはないとなじると、「ここは昔、融の大臣（おとと）が陸奥の塩竈に模して造られた所だから、汐汲みといったのは当然だ」と答える。

折から月が昇ってきたので、二人で籬が島の景色を眺め、また付近の名所を訪ね合い、さらに融公の故事を語り合っていた。

やがて老人は水を汲むかと思うと、そのまま姿を消してしまった。

## 紫式部の詠んだ歌

◆新古今和歌集◆

みし人の煙になりし夕よりなそむつまにしほがまの浦

死んでしまった人が煙になってしまった夕暮れ時、塩釜の浦の煙がどうして慕わしく感じないことでありましょうか。

## 浮島は塩竈沖に

奈良時代の女流歌人山口女王（やまぐちのおおきみ）が

塩竈のまへにうきたる浮島のうきて思ひのある世なりけり

と詠った「浮島」は多賀城の浮島ではなく、「馬放島（まはなしじま）（一名青海島）」だったという説があります。

（鹽松勝譜　巻八之一）

## 美しいものの代名詞　塩釜

「塩釜」は、好奇心旺盛な貴族達にとっては、あこがれの地として「美しいもの」の代名詞となっていきました。

そして「浜で美しい塩釜」は「葉まで美しいシオガマ(花)」というかけことば掛詞から数多くの「花の名」となっています。

たとえば、ヨツバシオガマ(中部地方)、ミヤマシオガマ(中部地方以北)、コシオガマ(日本全土)など十四種類に及びます。

そして、めしべが葉に変化した国の天然記念物「鹽竈神社の鹽竈桜」も「葉まで(浜で)美しい」という意味が込められているのです。

鹽竈桜

コシオガマの花

## 源融の伝説

源融は、陽成天皇の譲位で皇位を巡る論争が起きた際、自分も皇胤の一人であると主張しましたが藤原基経に退けられたといいます。

融の死後、河原院は息子の昇が相続、さらに宇多上皇に献上されており、上皇の滞在中に融の亡霊が現れたという伝説などが「江談抄」「古事談」に見えます。この話が、脚色されて源氏物語の夕顔巻に使われています。

## 東北で最も長い歴史のまち塩釜

塩釜は西暦七二四年に国府多賀城が築かれた際、その港町「国府津」としてつくられたまちです。そのときから現代まで、港町・門前町として東北で最も長い歴史を積み重ねてきました。ですから源融の話も長い歴史の中の一コマにしかすぎません。

さあ、塩釜で千三百年の歴史を堪能し、そして京文化の源となったものを見つけてみませんか。

### ◆「塩竈」と「塩釜」の表記◆

漢字の「竈」は「かまど」を意味しますが、「釜」は「かまどの上にのせるかま」という意味です。「竈」という漢字が画数も多く難しいためか、次第に簡易な表記で音も似ている「釜」の字と混在して用いられてきました。

昭和十六年、塩竈市役所では「塩竈」に統一して使用していますが、JRや施設名などには「塩釜」が多く用いられています。市名は「塩竈」ですが、公文書などでも「塩竈」と「塩釜」の両方を使用することが認められています。

### 地名の由来について

「塩竈」は、もともと海水を煮て塩をつくる製塩用のかまど(竈)を指す名詞でした。以前は日本各地の砂浜にこのようなかまど(塩竈)があり、これが海辺の風景に趣を添えていたといわれています。塩釜も、竈のある場所として有名になり、そのまま地名になったといわれています。

また、塩竈は「国府津(こうづ(国府の港という意味))」とも呼ばれていました。しかし、塩竈神社が、陸奥国の総鎮守として建てられ、信仰を集めるようになり、国府津よりも「塩竈」が地名として定着していったといわれています。


参考資料

・花井滋春氏より平成十九年七月ヒアリング
（東北福祉大学　教授）

・菅原周二氏より平成十九年七月ヒアリング
（NPO法人みなとしほがま　副理事長）

河原院跡
（京都府京都市下京区木屋町通
五条下る）にある案内板

光源氏の愛した地・塩釜へ
地域資源∞全国展開支援事業

発行日：平成19年8月22日
発行所：塩釜商工会議所
〒985-8504
宮城県塩釜市尾島町十七番十八号
TEL 022-367-5111（代）
FAX 022-367-5115
ホームページ http://www.shiogamacci.jp/